

## 令和5年度 第66回広島県看護学校研究発表会を終えて

呉医療センター附属呉看護学校  
3年生 戸田 真鈴

私は、広島県看護学校研究発表会の当校代表として、研究発表をする機会をいただきました。終末期実習において、70歳代の肺腺癌（多臓器転移）の終末期にある患者さんを受け持ちました。患者さんは癌転移により、右股関節や右足関節に疼痛、嘔気・嘔吐が生じていました。また、精神的な落ち込みと予後への不安があり、身体的にも精神的にも苦痛がありました。私は患者さんの苦痛を軽減したいと考え、頻回に訪室し、思いの傾聴や共感、擦るなどのタッチングをしながらコミュニケーションを行うと、患者さんに笑顔がみられました。また、不安や苦痛の表出がみられ、「あなたといると痛みが和らぐ」「安心する」と言われました。この関わりから終末期にある患者に対し、患者の側に寄り添い、共感・傾聴・タッチングをすることは苦痛の緩和や安心につながると学びました。さらに、論文作成では、患者さんとの関わりや出来事、その時の患者さんの反応など細かく振り返り、研究指導教員をはじめ様々な先生方の指導のもと、論文を作成することができました。

当日の研究発表会は、広島県内12校の看護学校全体で、Web配信で行われました。私の順番になると緊張しましたが、患者さんとの関わりを通して学ばせていただいたことを発表させていただき、共有することができました。また、質疑応答や講評では多くの方々から様々なご意見をいただき、学びの多い発表になりました。今回の広島県看護学校研究発表会を終え、自己の看護を振り返り、看護観を深める事ができました。



第66回広島県下看護研究発表会 開会式

Web配信による発表の様子

